

谷

宮沢賢治

青空文庫

檐渡ならわたりのこの崖がけはまつ赤でした。

それにひどく深く急でしたからのぞいて見ると全くくるくるするのでした。

谷底には水もなんにもなくてたゞ青い梢こすゑと白樺しろかばなどの幹が短く見えるだけでした。

向ふ側もやっぱりこつち側と同じやうでその毒々しく赤い崖には横に五本の灰いろの太い線が入つてみました。ぎざぎざになつて赤い土から喰はみ出してゐたのです。それは昔山の方から流れて走つて来て又火山灰に埋うづもれた五層の古い熔岩流ようがんりゅうだったのです。

崖のこつち側と向ふ側と昔は続いてゐたのでせうがいつかの時代に裂けるか罅われるかしたのでせう。霧のあるときは谷の底はまつ白でなんにも見えませんでした。

私をはじめてそこへ行ったのはたしか尋常三年生か四年生のころです。ずうつと下の方の野原でたった一人野葡萄のぶだうを喰べてゐましたら馬番の理助りすけが鬻金うりごんの切れを首に巻いて木炭すみの空俵すまゝをしようつて大股おほまたに通とおりかかったのです。そして私を見せずるぶんな高声で言ったのです。

「おいおい、どこからこぼれて此処ここらへ落ちた？ さらはれるぞ。葦きのうんと出来る処へ連れてつてやらうか。お前まへなんかには持てない位葦のある処へ連れてつてやらうか。」

私は「うん。」と云ひました。すると理助は歩きながら又言ひました。

「そんならついて来い。葡萄などもう棄てちまへ。すっかり唇も齒も紫になつてる。早くついて来い、来い。後れたら棄てて行くぞ。」

私はすぐ手にもつた野葡萄の房を棄ていっしんに理助について行きました。ところが理助は連れてつてやらうかと云つても一向私などは構はなかつたのです。自分だけ勝手にあゝるいて途方もない声で空に嘯ぶりつくやうに歌つて行きました。私はもうほんたうに一生けんめいついて行つたのです。

私どもは柏の林の中に入りました。

影がちらちらちらちらして葉はうつくしく光りました。曲つた黒い幹の間を私どもはだんだん潜つて行きました。林の中に入つたら理助もあんまり急がないやうになりました。又じつさい急がないやうでした。傾斜もよほど出てきたのでした。

十五分も柏の中を潜つたとき理助は少し横の方へまがつてからだをかゞめてそこらをしらべてゐましたが間もなく立ちどまりました。そしてまるで低い声で、

「さあ来たぞ。すきな位とれ。左の方へは行くなよ。崖だから。」

そこは柏や櫨の林の中の小さな空地でした。私はまるでぞくぞくしました。はぎぼだし

がそこにもこゝにも盛りになつて生えてゐるのです。理助は炭俵をおろして尤もつともらしく口をふくらせてふうと息をついてから又言ひました。

「いゝか。はぎぼだしには茶いろのと白いのとあるけれど白いのは硬くて筋が多くてだめだよ。茶いろのをとれ。」

「もうとつてもいゝか。」私はききました。

「うん。何へ入れてく。さうだ。羽織へ包んで行け。」

「うん。」私は羽織をぬいで草に敷きました。

理助はもう片っぱしからとつて炭俵の中へ入れました。私もとりました。ところが理助のとるのはみんな白いのです。白いのばかりえらんでどしどし炭俵の中へ投げ込んでゐるのです。私はそこでしばらくあき呆れて見てゐました。

「何をぼんやりしてゐるんだ。早くとれとれ。」理助が云ひました。

「うん。けれどお前はなぜ白いのばかりとるの。」私がききました。

「おれのは漬物つけものだよ。お前のうちぢやきのこ蕈の漬物なんか喰べないだらうから茶いろのを持つて行つた方がいゝやな。煮て食ふんだらうから。」

私はなるほどと思ひましたので少し理助を気の毒なやうな気もしながら茶いろのをたく

さんとりました。羽織に包まれないやうになつてもまだとりました。

日がてつて秋でもなかなか暑いのでした。

間もなく藁も大ていなくなり理助は炭俵一ぱいに詰めたのをゆるく両手で押すやうにしてそれから羊歯しだの葉を五六枚のせて縄なはで上をからげました。

「さあ戻るぞ。谷を見て来るかな。」理助は汗をふきながら右の方へ行きました。私もついて行きました。しばらくすると理助はびたつととまりました。それから私をふり向いて私の腕を押へてしまひました。

「さあ、見ろ、どうだ。」

私は向ふを見ました。あのまつ赤な火のやうな崖がけだったので。私はまるで頭がしいんとなるやうに思ひました。そんなにその崖が恐ろしく見えたのです。

「下の方もぞかしてやらうか。」理助は云ひながらそろそろと私を崖のはじにつき出しました。私はちらつと下を見ましたがもうくるくるしてしまひました。

「どうだ。こはいだらう。ひとりで来ちやきつとこゝへ落ちるから来年でもいつでもひとりで来ちやいけないぞ。ひとりで来たら承知しないぞ。第一みちがわかるまい。」

理助は私の腕をはなして大へん意地の悪い顔つきになつて斯かう云ひました。

「うん、わからない。」私はぼんやり答へました。

すると理助は笑つて戻りました。

それから青ぞらを向いて高く歌をどなりました。

さっきの蓆を置いた処へ来ると理助はどっかり足を投げ出して座つて炭俵をしよひました。それから胸で両方から繩なはを結んで言ひました。

「おい、起して呉れ。」

私はもうふところへ一杯にきのこをつめ羽織を風呂敷包みのやうにして持つて待つてゐましたが斯かう言はれたので仕方なく包みを置いてうしろから理助の俵を押してやりました。理助は起きあがつて嬉うれしさうに笑つて野原の方へ下りはじめました。私も包みを持つてうれしくて何べんも「ホウ。」と叫びました。

そして私たちは野原でわかれて私は大威張おほぼばりで家に歸つたのです。すると兄さんが豆を叩たたいてゐましたが笑つて言ひました。

「どうしてこんな古いきのこばかり取つて来たんだ。」

「理助がだつて茶いろのがいゝつて云つたもの。」

「理助かい。あいつはずるさ。もうはぎぼだしも過ぎるな。おれもあしたでかけるかな。」

私も又ついでに行きたいと思つたのでしたが次の日は月曜ですから仕方なかつたのです。そしてその年は冬になりました。

次の春理助は北海道の牧場へ行つてしまひました。そして見るとあすこのきのこはほかに誰かたれに理助が教へて行つたかも知れませんがまあ私のものだったので。私はそれを兄にもはなしませんでした。今年こそ白いのをうんととつて来て手柄を立ててやらうと思つたのです。

そのうち九月になりました。私ははじめたつた一人で行かうと思つたのですがどうも野原から大分奥でこはかつたのですし第一どの辺だつたかあまりはつきりしませんでしたから誰か友だちを誘はうときめました。

そこで土曜日に私は藤原慶次郎にその話をしました。そして誰にもその場所をはなさないなら一緒に行かうと相談しました。すると慶次郎はまるでよろこんで言ひました。

「ならわたり 檜 渡 なら方向はちやんとわかつてゐるよ。あすこでしばらく木炭すみを焼いてゐたのだから方角はちやんとわかつてゐる。行かう。」

私はもう占めたと思ひました。

次の朝早く私どもは今度は大きな籠かごを持つてでかけたのです。実際それを一ぱいとるこ

とを考へると胸がどかどかするのです。

ところがその日は朝も東がまつ赤でどうも雨になりさうでしたが私たちが柏かしはの林に入つたころはずるぶん雲がひくくてそれにきらきら光つて柏の葉も暗く見え風もカサカサ云つて大へん気味が悪くなりました。

それでも私たちはずんずん登つて行きました。慶次郎は時々向ふをすかさずやうに見て「大丈夫だよ。もうすぐだよ。」と云ふのでした。實際山を歩くことなどは私よりも慶次郎の方がずうつとなれてゐて上手でした。

ところがうまいことはいきなり私どもはぎぼだしに出でつ会くはしました。そこはたしかに去年の処ではなかつたのです。ですから私は

「おい、こゝは新らしいところだよ。もう僕らはきのこ山を二つ持ったよ。」と言つたのです。すると慶次郎も顔を赤くしてよろこんで眼めや鼻や一緒になつてどうしてもそれが直らないといふ風でした。

「さあ、取つてかう。」私は云ひました。そして白いのばかりえらんで二人ともせつせと集めました。昨年のことなどはすっかり途中で話して来たのです。

間もなく籠かごが一ぱいになりました。丁度そのときさつきからどうしても降りさうに見え

た空から雨つぶがポツリポツリとやって来ました。

「さあぬれるよ。」私は言ひました。

「どうぞせつぶぬれだ。」慶次郎も云ひました。

雨つぶはだんだん数が増して来てまもなくザアツとやって来ました。檜ならの葉はパチパチ鳴りしづくの音もポタツポタツと聞えて来たのです。私と慶次郎とはだまって立ってぬれました。それでもうれしかったのです。

ところが雨はまもなくぱたつとやみました。五六つぶを名なご残りに落してすばやく引きあげて行つたといふ風でした。そして陽ひがさつと落ちて来ました。見上げますと白い雲のきれ間から大きな光る太陽が走つて出てゐたのです。私どもは思はず歓呼の声をあげました。檜かしはや柏の葉もきらきら光つたのです。

「おい、こゝほどの辺だけ見て置かないと今度来るときわからないよ。」慶次郎が言ひました。

「うん。それから去年のもさがして置かないと。兄さんにでも来て貰もらはうか。あしたは来れないし。」

「あした学校を下つてからでもいゝぢやないか。」慶次郎は私の兄さんには知らせたくな

い風でした。

「帰りに暗くなるよ。」

「大丈夫さ。とにかくさがして置かう。崖がけはぢきだらうか。」

私たちは籠はそこへ置いたまま崖の方へ歩いて行きました。そしたらまだまだと思つてゐた崖がもうすぐ目の前に出ましたので私はぎくつとして手をひろげて慶次郎の来るのをとめました。

「もう崖だよ。あぶない。」

慶次郎ははじめて崖を見たらしくいかにもどきつとしたらしくしばらくなんにも云ひませんでした。

「おい、やつぱり、すると、あすこは去年のところだよ。」私は言ひました。

「うん。」慶次郎は少しつまらないといふやうにうなづきました。

「もう帰らうか。」私は云ひました。

「帰らう。あばよ。」と慶次郎は高く向ふのまつ赤な崖に叫びました。

「あばよ。」崖がけからこだまが返つて来ました。

私にはかに面白くなつて力一ぱい叫びました。

「ホウ、居たかあ。」

「居たかあ。」崖がこだまを返しました。

「また来るよ。」慶次郎が叫びました。

「来るよ。」崖が答へました。

「馬鹿^{ばか}。」私が少し大胆になつて悪口をしました。

「馬鹿。」崖も悪口を返しました。

「馬鹿野郎」慶次郎が少し低く叫びました。

ところがその返事はたゞごそごそつとつぶやくやうに聞えました。どうも手がつけられないと云つたやうにも又そんなやつらにいつまでも返事してゐられないなど自分ら同志で相談したやうにも聞えました。

私どもは顔を見合せました。それから俄^{には}かに恐^{こは}くなつて一緒に崖をはなれました。

それから籠^{かご}を持ってどんどん下りました。二人ともだまってどんどん下りました。雫^{しづく}ですつかりぬればらや何かに引つかゝれながらなんにも云はずに私どもはどんどんどんどん遁^にげました。遁^にげれば遁^にげるほどいよいよ恐^{こは}くなつたのです。うしろでハツハツハと笑ふやうな声もしたのです。

ですから次の年はたうとう私たちは兄さんにも話して一緒にでかけたのです。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第九卷」筑摩書房

1979（昭和54）年7月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年2月20日初版第5刷発行

底本の親本：「校本宮沢賢治全集」筑摩書房

入力：田代信行

校正：伊藤時也

2000年9月13日公開

2005年10月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

谷
宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>